

## 2022年度-2023年度 地域交流・連携推進事業報告

「瀬名フェス2023」・「あつめてたのしもうーひかりとおとー」

### Report of Community Cooperation Project 2022-2023

“SENA Festival” and “Let's pick up and enjoy sound and light in the forest”

遠藤 知里\*, 井上 幸子\*, 宮本 淳子\*, 木下 藍\*,  
森 広樹\*, 辻井 寛\*\*, 花岡 清美\*\*\*

ENDO Chisato\*, INOUE Sachiko\*, MIYAMOTO Junko\*, KINOSHITA Ai\*,  
MORI Hiroki\*, TUJII Hiroshi\*\*, HANAOKA Kiyomi\*\*\*

キーワード：地域交流 サービスラーニング

Keywords : Community Cooperation, Service Learning

#### 抄録

本稿は、2022年度・2023年度に採択された地域交流・連携推進事業の実践報告である。体験後の学生の振り返りの記述内容から、学生にとって本事業での体験が子ども理解と実践力の向上につながる事が察せられ、それを本プログラムの成果として位置付けた。一方で、昨年の課題を踏まえ、参加した子どもたちの声から直接体験を聴き取ることで、体験の意味を知ることができた。今回の事業を通して、三学科の特色と、教員の専門性を活かした地域交流の新たな着想を得ることができた。来年度以降も継続していきたい。

#### 1. はじめに

本稿では、本学の地域交流・連携推進事業として2022年度に採択された「しずおかの気になる 木の音きいてみよう！」の一部である「瀬名フェス2023」と、2023年度に採択された「音楽・日本画・物語による静岡の自然とサウンドスケープの探究」の一部である「あつめてたのしもうーひかりとおとー」について報告する。

2023年3月18日に短期大学部音楽科が立地する瀬名キャンパスにて、また2023年9月18日に静岡県立朝霧野外活動センターにて、短期大学部学生と保育学部保育学科学生の協力を得て、継続的に地域交流事業を実施するに至ったことに、まずは感謝申し上げます。

\*常葉大学短期大学部 \*\*静岡県東部農林事務所森林整備課

\*\*\*常葉大学短期大学部保育科非常勤講師

## 2. 事業の目的

筆者らは、短期大学部三学科（日本語日本文学科、保育科、音楽科）の特色と、参画する各教員の専門性を活かした地域交流事業として、野外教育・幼児教育・音楽・美術・物語の各要素が融合した環境教育的な野外教育プログラムを構想した。

2022年度プログラムの目的は、以下の通りである。静岡県は県土の64%が森林であり、SDGsの観点からも森林環境教育推進のニーズがある。そこで、すべての世代への「木育・森林環境教育」を目的として、短期大学部の三学科の特色を活かした地域貢献活動の展開を試みた。具体的には、多様な年齢層への展開を視野に入れ、音楽・美術・物語が融合した「木育・森林環境教育」の教材開発を行い、それを活用する野外教育プログラムを実施すること、その野外教育プログラムに学生が参加することで、地域の自然環境への理解を深めるとともに、自らの専攻分野と地域社会との結びつきに気づく機会とすることを目指した。

また、2023年度については、前年度プログラムの成果を発展させ、以下の目的で構想した。静岡県の豊かな自然環境は、同時に豊かな音環境・音風景（サウンドスケープ）を擁する。音環境・音風景（サウンドスケープ）とは、カナダの作曲家R. マリー・シェーファーが提唱した概念で、個人と環境との関係を身体で受容する体験と解釈でき、自然と人間の関係を理解する上でも重要な体験のひとつと捉えられる。そこで、すべての世代に「原体験的音環境の体験」を届けることを目指した。

## 3. 参加者

### 3.1. 瀬名フェス2023

本事業は、本学キャンパスを会場として実施する体験型音楽プログラムによる地域交流事業であり、第2筆者が指導する短期大学部音楽科の学生の演奏を楽しみながら乳幼児が打楽器や自由な動きでフリーセッションするというプログラムで、近隣地域の児童館および本学附属幼稚園（ここは幼稚園、たちばな幼稚園）に参加者募集を依頼して実施した。参加型音楽プログラムの参加者の内訳を、Table 1 に示した。

Table 1 参加型音楽プログラムの参加者 Participants of music program

子ども	保護者	その他	音楽科生	専攻科音楽専攻	教員	外部講師
15名	12名	4名	3名	1名	5名	1名

### 3.2. あつめてたのしもうーひかりとおとー

本事業は、静岡県立朝霧野外活動センターを会場として実施する地域交流事業であり、第1筆者が関与している野外教育プログラム「とことこキャンプ」（主催：とことこキャンプ実行委員会、協力：静岡県立朝霧野外活動センター）に対して、三学科の教員と学生がプログラム提供する形式で実施した。

野外教育プログラムの参加者の内訳を、Table 2 に示した。幼児（年中児・年長児）は、

とことこキャンプの参加者であった。音楽科生は、クラリネットを専攻する学生（本科生1名）であった。保育科生は、保育科専門科目「レクリエーション論」、「レクリエーション援助法」、「子どものフィールドワーク」等の受講経験がある学生を中心とした有志学生（2年生1名、1年生2名）であった。保育学部生は、保育学部保育学科今村貴幸ゼミナールの学生（4年生9名、3年生1名）であった。教員は、本稿の筆者らであった。外部講師は、乳幼児とその保護者を対象とした音楽療法の実践を行っている音楽療法士であった。

Table 2 野外教育プログラムの参加者 Participants of outdoor education program

幼児	音楽科生	保育科生	保育学部生	教員	外部講師
27名	1名	4名	11名	4名	1名

### 3.3. 倫理的配慮

本事業は、常葉大学・常葉大学短期大学部研究倫理委員会の審査（23-12）を受け、写真使用や感想等の報告書掲載の許諾を、参加者、保護者、学生ボランティアから得ている。

## 4. プログラムと評価

### 4.1. 瀬名フェス2023

#### 4.1.1 概要

今年度の活動のアウトリーチとして2023年3月18日（土）に、常葉大学瀬名キャンパスにて、アルプホルンとフレンチホルンの演奏による「瀬名フェス2023」を実施した。

静岡市立西奈児童館、静岡市立草薙児童館、常葉大学附属とこは幼稚園・たちばな幼稚園に広報へのご協力をいただき、当日は、子ども15名、保護者12名、学生1名、その他の大人3名の参加があった。

#### 4.1.2. 当日の様子

当日は、会場に打楽器を多数用意し、演奏開始までの時間や、演奏中に、子どもたちが自由に音を出して楽しむことができたようにした。演奏は、となりのトトロなど子どもたちにとって親しみのある曲ではじまり、続いて9月プログラムで制作したアルプホルンの楽曲が演奏された。演奏終了後には、子どもたちが直接アルプホルンに触れる時間を設けた。子どもたちは、ベルの部分に耳を当てたり、抱きついたりして、多様な方法で聴き取っていた。小さな子どもたちの楽器や演奏への順応性の高さ、関心の表し方の多様性、場の中でどのようなリズムを感じ取っているのか等、多くの発見があるひとときであった。



Picture 1 演奏者が近い！音が近い！楽器が近い！参加型音楽プログラム  
Performer was very close to children in music program

#### 4. 1. 3. 評価

参加者へのアンケートの結果をTable 3 に示した。子どもたちの年齢は、1歳から中学生までさまざまであったが、楽しく過ごしてもらえたようであった。演奏を聞かるときに「静かに聴かなくても良い（打楽器で自由に音を出しながら聴いて良い）、動き回っても良い」という場の設定であることは珍しく、小さな子どもたちが自然な姿で「聴く」ことができた。このような場づくりができたのは、2022年9月のプログラム（2022年度の紀要で報告）での、プラネタリウムでの演奏会の気づきが活かされたものといえる。このように、自然な形で場づくりの勘所をおさえることができるようになるということは、継続的な取り組みによる成果であるといえる。一点、当日は雨天で気温が低く、会場とした場所は暖房設備がなかったため、寒く感じられた。今後実施する場合には、改善していきたい。

以下、自由記述の感想をまとめた。「触れた・触った」、「体感した」、「間近に・身近に感じた」、「自由感が良かった」、「貴重な時間」というような言葉が多く見られた。総合的にみて、今回のプログラムも好評であったといえる。

- ・太鼓などたたくとき、「押さえると音が違う！おもしろい！」との発見もありました。
- ・静かに聴かないといけないオーケストラの演奏会ですと子連れで中々行きづらい中、楽器に触れながら楽しく身近にこのように音を感じられる機会、とても貴重で、嬉しいです。またこのような機会があればぜひ参加したいです。
- ・普段楽器に触れることがないので貴重な時間でした。
- ・なかなか見ることのできないアルプホルン、大人のほうが見入ってしまいました。生の音を体感できて良かったです。
- ・音楽を聴くだけでなく、楽器を触ってみたり、太鼓を叩いたりできたのが良かった。
- ・こんなに間近で聴けて、見られて、触れて、とても貴重な体験ができ、来て良かった。
- ・子どもは最初緊張して、固まっていたのですが、音楽が始まると楽しんで、自分から音を出していました。参加型とてもいいですね！自由な感じも素敵です！
- ・（中学生の子どもは）小さい妹に連れられて来ましたが、それなりに楽しそうでした。木が好きなので、アルプホルンを珍しそうに見ていました。
- ・子連れに優しいコンサートで、すごく有難いです！ぜひまた開催して頂きたいです。
- ・時間もコンパクトで、自由で、子どもの目線に立ちつつ本物と触れられる素敵なイベントでした！

Table 3 参加型音楽プログラムのアンケート集計 Evaluation by participants of music program

参加人数		人数		心に残った音		感じた気持ち	
子ども	15人	0歳	1	アルプホルン	10	楽しい	11
保護者	12人	1歳	0	ホルン	10	ワクワク	4
短大生	1人	2歳	4	おはなし	8	集中	4
大人のみ	3人	3歳	3	雨の音	1	ドキドキ	3
		4歳	2			うきうき	2
		5歳	1	(その他 心に残った音)		しっとり	2
		6歳	2	・子どもたちの楽しそうな声		ニコニコ	2
スタッフ		小学生	1	・大人たちの楽しそうな声		のびのび	2
学生	4人	中学生	1	・階段室の響き、こだま		感動	1
教員	5人	保護者	12	・打楽器の音		興奮	1
外部講師	1人	短大生	1				
録画技術者	1人	大人のみ	3				

#### 4.2. あつめてたのしもうーひかりとおとー

##### 4.2.1. 音楽プログラムの内容と当日の様子

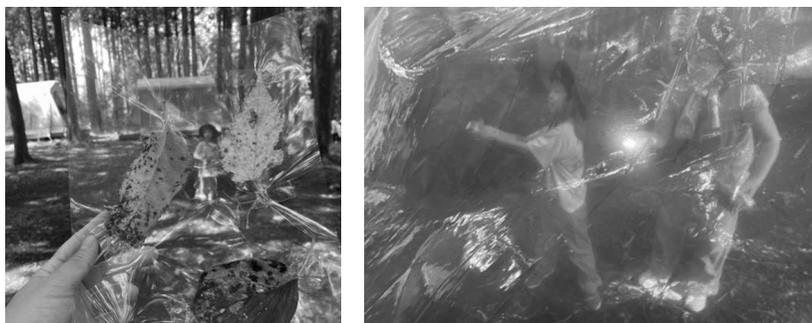
前出の野外教育プログラム「とことこキャンプ」において、2023年9月18日（月）に、静岡県立朝霧野外活動センターキャンプサイトおよび周辺の森において、子どもたちと学生が光と音、その重なりを探索し、制作や演奏、鑑賞を通して楽しむ活動を実施した。以下、その活動内容を順に紹介する。

##### (1) 活動紹介（あいさつ・自己紹介）

受付の後あいさつをし、5つのグループに分かれて、キャンプサイト周辺を散策して自由に遊んでもらった。中には、こうした活動に慣れておらず、保護者との分離で気持ちが不安定になる子もいたが、その後、徐々に関わりあう中で信頼関係を築き安心して過ごせている様であった。

##### (2) 素材集め・探索

周辺の森を子どもと一緒に散策し、気に入った音、気になる音、好きな場を選び、見つけたものを使って遊んだり、制作の材料となる木の実や葉、小枝、石などを採集するなどして過ごした。自然の中で、子ども達が様々な「ひかりとおと」を見つけ、互いにそれについて言葉を交わし、イメージをふくらませているようだったという話も聞いた。十分に身体を使って遊ぶことに加え、自由に様々な遊びを体験できるよう、キャンプサイト内の日陰の場所に、制作の材料コーナー（ペットボトル、様々な容器、カラーセロファン、テープ、はさみ、カラーペン、懐中電灯・ライト類）と楽器コーナー（ハンドドラム、ボンゴ、ウィンドチャイム、トーンチャイム、ガンサ、シェーカー類、カエルギロ、カスタネット、タンバリン、ミニシンバルなど）を設置した。更に、森の中の数か所に枝の間にビニールシートを張り、木漏れ日やライトの光で遊べそうな場所も作り付けた。子ども達はそこで自由に素材を触ったり、使い方を試したり、音色を聴いて、探索しているようだった。



Picture 2 木漏れ日、揺れる影、光で遊ぶ Playing with lights

### (3) 作る・試す

集めた自然の素材や材料を使い、子どもが主体となって光や影を楽しめる作品づくりに取り組んだ。学生の何人かは「おと」と「ひかり」を事前に試作した中で得た気づきを子ども達に提示することで興味を持ってもらうきっかけとしているようだった。制作と平行して、その作品のイメージに合う音、自然の音や楽器を見つけていくことも想定されたが、多くの子ども達にとっては、出合うものの一つ一つ、制作や音そのものに集中して楽しむ時間となった。制作コーナーでは、様々な材料を自由に手に取って光を当ててみたり、収集した木の実や花などを組み合わせてみる他、周囲とやり取りしながら考えたりして、しばらくすると集中して作り始めるなどの様子が見られた。一方楽器コーナーでは、自由に楽しんで探索してもらうことを大事にしつつ、一人ひとりの出す音を「聴く」こと、音を出すための探索が安全かつ十分にできるよう、状況に合わせた声掛けや補助等の介入を学生と共にを行った。例えば、鳴らし方によっては静かな音、きれいな音を生み出すことも出来ると伝えると、優しい手つきで耳を澄ませながらそうした音を奏でることが出来ているようだった。また、仲間との掛け合いから、即興が始まることもあった。子どもによっては、静かなテントの中で音を聴き比べたいといくつかの楽器を選んで試していた。

こうした遊び以外にも、身体を動かしふれあったり、生きもの探しに夢中になる子どもたちもいた。ヒキガエルを見つけた子は他の子や学生と相談し、横長のプラスチック容器に穴をあけ、土や草などを入れ、日陰になるよう紙袋で覆うなどカエルにとって心地よい場所を作っていた。



Picture 3 テント内の響きに耳を傾ける  
Listening to sounds in a tent



Picture 4 十分に探索し、試し、作る  
Exploring for creation



Picture 5 木の葉や実、生きものを採集する、/カエルにとって心地よい場所を制作する  
Gathering living things /Making a comfortable environment for a frog

#### (4) おひるごはんをつくろう・たべよう

カンガルートースト（具をはさんだパンをホイルで包み牛乳パックに入れて燃やす）を作った。材料集めからダイナミックに火を使って調理したホカホカのトーストを取り出して味わうまで、そのプロセスも五感で愉しんでいるようであった。



Picture 6 つくってたべよう



Cooking "Kangaroo Toast" for lunch

#### (5) 森の音楽会～一緒に楽しもう

野外活動センター本館オリエンテーション室に移動し、木管楽器クラリネットの二重奏でなじみのある作品を鑑賞した。それぞれ「ひかりとおと」の作品を持ち寄りそれらを互いに鑑賞したり、クラリネットの演奏に合わせて打楽器を鳴らして楽しむ様子が見られた。コップで作った木の実入りマラカスを叩いたり、カエルギロで指揮をしたり、ビートに合わせて楽器を鳴らし動き出す子もいれば、ぐっと引き付けられるように聴き入っている子もいた。特に、「さんぼ」の曲では、歌いだしたり、お気に入りのフレーズで力強く楽器を振り鳴らすなど、様々に表現する様子が見られ、それだけの思い入れがあることも感じられた。



Picture 7 間近でクラリネットの生演奏に触れ、「ひかりとおと」の作品、打楽器で共に楽しむ  
Listening to live music, playing handmade instruments and lights to the beat

#### 4.2.2. アンケート結果

##### (1) 子ども用アンケート（自由記述、グループごとに聴き取り、学生が記入。）

活動後にアンケートを行い、一日を共にした学生に活動を通した感想や、面白かったことなどコメントをもらった。回答者27名（年中12名、年長15名）であった。回答内容の一部を以下に紹介する。

##### ① 作って楽しんだ「ひかりとおと」

- ・ライトの先に透明のコップを付け、中に木の実・花を入れた。
- ・紙皿の真ん中を開け、リースを作った。空を見たらすごくきれい。
- ・マラカスを作った。・モンスター（コップに絵を描き、懐中電灯を照らす）
- ・だいおういか ・おべんとう ・紙コップで作ったキラキラがきれいだった。
- ・タンバリンの音きれいだった、テントの中の光がきれい。

##### ② 工夫したこと、難しいと思ったところ、頑張ったところ

- ・ペットボトルにライトのろうそくをつけた。 ・パン作りが難しかった。
- ・こおろぎみつからなかった。クビキリギリスにかまれた。
- ・折るの嫌いなのに頑張った。 ・紙コップを切る作業が難しかった。
- ・嫌いなキャベツを食べた。 ・お母さんの好きな色を考えて作った。
- ・テープでつけるのが難しかったけど、もう一度やってみたらできた。

③ 作る時に発見したこと、面白いと思ったこと

- ・紙コップに青のキラキラ用紙をつけて照らしたら青に光った。
- ・木の実を入れたら音が出て、楽器になった。 ・金の石を見つけた。
- ・紙皿の真ん中から顔を出して楽しかった。
- ・杉の木の実をマラカスにして振ったら色がついた。

④ すてきだな、気になるな、と思った「ひかり」「おと」

- ・カスターネット ・アンパンマンの音 ・鳥の声 ・鉄琴 ・ウィンドチャイム
- ・カラスの鳴き声 ・根っこのおうち ・とんぼとちょう ・きのこ
- ・紙コップで作ったライト 赤いセロファンをマラカスに入れたらきれいだった。
- ・トトロの歌がすてきだった。 ・「ギギギ」「ツツツツ」の音が聞こえた。
- ・歩いた時に葉っぱがカサカサしたり、土の音がした。

⑤ 活動の感想

- ・一緒に遊べて楽しかった。 ・楽しかった、もう一回来たい。 ・ご飯おいしい。
- ・だるまさんがころんだ、おにごっこ楽しかった。 ・みどりがいっぱいあった。
- ・虫がたくさんつかまえられてうれしかった。 ・ライト遊びたのしかった。

4.2.3. ボランティア学生による評価

学生のアンケート（全体の感想）の記述をまとめ、以下に示した。学生の事後アンケートから、本事業での体験が子ども理解と実践力の向上につながる事が察せられた。また、プログラム全体としては、食事時間を含めて4時間半という時間枠に対して活動内容が過密であり、幼児を対象とした自然体験活動としては運営方法に課題が残った。

(1) 子どもの姿への気づき

- ・子どもたちが、自然のもので、自分たちで考えて、遊びや遊び道具を作っていたことに驚いた。木の枝の上を歩いて迷路にしたり、コオロギを探したりしていた。
- ・子どもたちの表情が輝いていた。
- ・男児より女児のほうが勇気があってずんずん進んでいた。虫や木の形の発見をたくさんできていた。日陰と日向のところの違いを教えてくれた。
- ・過度に大人が関わらずとも、子どもたちは自分たちで楽しさを見つけ活動していた。
- ・森の探検では、目印を数えたり、土のやわらかさを楽しんだり、様々な発見をしていた。
- ・最近（子どもも私たちも）、テレビやスマホなどに関わる事が多いので、自然の中で遊ぶことは大切と考えた。
- ・森の探検や楽器のスペースでは「どんな色があるかな」「暗い場所だとどうなるのかな」など、子どもたちと考えながら行うことができ、とても楽しくできた。
- ・晴れていたため、外では光を感じ、テントでは暗闇（影）をよく感じる事ができた。暗い＝真っ暗ではなく、木の影や、テントでも、暗さを感じられる。
- ・「音」について、子どもたちの中では最後のクラリネットの演奏の印象が強く、森の中の「音」を感じる事が難しかったかもしれない。

- ・紙コップやセロハンなどさまざまな材料を使い、青のライトやロボットなど思い思いの作品を作り上げている姿に感銘を受けました。
- ・制作では、子どもたちが黄色のセロハンと透明のセロハンでカレーを作ったりなど子どもの想像力や工夫力のすごさを感じた。
- ・演奏時、子どもたちが手を叩いてリズムに乗って楽しんでくれていたのが、一緒に音楽を楽しんだ感じがして、子どもたちとのつながりを感じた。

## (2) 子どもへの援助方法の気づき

- ・子どもたちの興味関心を大切にし、遊びがより広がるようにサポートすることが重要だと考えた。
- ・散歩では、子どもの目線になるとさまざまな発見をすることができた。
- ・私たちが何かをしてあげるのではなく、一緒になって楽しむということを、無意識のうちに行っていた。
- ・仲の良い友達がいることで、自然を友だちと共有し、より楽しむことができたと思う。
- ・子どもの気持ちに寄り添うことで、子どもとの距離が少し近づいた。
- ・子どもは、子どもの低い姿勢の世界で散歩などを楽しんでいる。散歩をしていて子どもが立ち止まったら（自分も）低い姿勢になると良い事がわかった。
- ・子どもの柔軟な発想のように、自分も様々な視点から物事を考え対応していきたい。

## (3) 実践方法の改善への視点

- ・グループ分けをしても、探検ではバラバラに行動し、大人1人が子ども2人を見守るような感じで、グループ分けの効果があまり感じられなかった。
- ・楽器の使い方がどこまでが良いのかなど、今日は「～があってどうやって使う」、「何時まで活動する」がはっきりしておらず戸惑った。学生カウンセラー内で事前に全てを共有し、わからないことがないようにしてから挑む方が私には合っていると思った。

## 5. おわりに

本稿では、2022年度・2023年度に採択された地域交流事業の実践について報告した。いずれも本学短期大学部が有する三学科の特色を土台とし、地域交流の観点から企画したプログラムであった。参加学生の振り返りから、主体的に子どもと関わる中で、子どもの感性に対する率直な気づきはもちろん、自ら「問い」を発見し、解決策を模索する姿や保育観の醸成につながるであろう記述も確認でき、交流の場での体験が子ども理解と実践力の向上につながることを察せられた。また、サービスマーケティングの観点からは、本事業での体験において、実際に子どもと接したからこそ認識し得る物事を、自らの専攻の学びに立脚した視座から捉え直し、新たな知識の獲得を実現させている（あるいは、実現させようとしている）ことが、振り返りの記述から読み取れた。これらを、本プログラムの主要な成果として位置付けたい。

さらに、昨年の課題を踏まえ、体験の意味を知る上で、参加した子どもたちの声から直接体験を聴き取ることで、一方的な理解ではなく、子どもの視点からプログラムの価値を

検証することができた。これも本プログラムの成果であり、筆者らの教育活動に還元できる貴重な資料を得ることができた。

ただし、本稿で報告した2つのプログラムについては、日本語日本文学科学生の参加が実現しておらず、三学科の特色を土台とする観点からは、日本語日本文学科の学生が効果的に参加し得るプログラム作りが必要であると考えられる。幼児を対象とした自然体験活動であり、時間枠に対する活動内容の吟味は必要であるが、より三学科の特色を活かしたプログラム構成について検討し、工夫・改善を行いながら、次年度についても継続して取り組みたい。

## 引用文献

R.マリー・シェーファー（2006）世界の調律:サウンドスケープとは何か. 平凡社.

## 謝辞

本事業は、「2022年度・2023年度常葉大学・常葉大学短期大学部地域交流・連携推進事業」の助成を受けて実施されました。

また、本事業の実施にあたり、静岡県立朝霧野外活動センターの皆様には、計画段階から当日の実施に至るまで、プログラムへの助言、施設・備品利用の便宜等、全面的なご協力を頂きました。ここに記して、感謝の意を表します。

## 活動の様子（動画報告）

2023/3/18 瀬名フェス2023 常葉大学 瀬名キャンパス

9:10「語りと音」～となりのトトロ（ホルン四重奏）とナレーション

19:28「木の音を聴いてみよう」～アルプホルンの音を聴いてみよう

<https://youtu.be/mvEI7Mwjxbw>



2023/9/18 あつめてみよう ーひかりとおとー

静岡県立朝霧野外活動センター

「森の音楽会」～一緒に楽しもう～

<https://youtu.be/GkT50PnZ3tA>



2023/9/18 2023/9/18 あつめてみよう ーひかりとおとー

静岡県立朝霧野外活動センター

「森で きこえる 音」

<https://youtu.be/gvFtVDmBnY4>

